

読者層を異にする文章間に見られる文構造の相違(2)

——主語と述語の間の距離による日本史教科書の段階比較——

小宮 千鶴子

- 〈目次〉
- I 序論
 - 1 調査の目的
 - 2 資料
 - 3 主語と述語の距離の測定
 - II 日本史教科書における主語と述語の距離
 - 1 データの扱い方
 - 2 段階別の代表値・分布型
 - III 類似内容における主語と述語の距離
 - 1 小学校から高校までの伸び方
 - 2 高校から大学への縮み方
 - IV まとめ

I 序 論

1 調査の目的

同じ内容の文章を書く場合でも、想定する読者が異なれば書き方もおのずと変わってくる。異なる読者にむけて書かれた文章は、同じ内容でも、文長・文構造・語彙・表現・表記などに違いが現れると予想される。その違いの中には文長や語彙量のように計量の可能なものもあれば、表現のように質的な考察が特に重要なものもある。異なる読者を対象とする、同じ内容の文章間に生じる言語的な違いの調査は、日本語教育や国語教育における読解教材の作成や選定、専門的な内容を一般向けに解説する文章の作成などを適切に行うための基礎として重要であると思われる。

ところで、「同じ内容」の文章とは、どのようなものを指すのであろうか。同じということを厳密に考えれば、そのような文章は実験などにより設定するほか現実には存在しがたいものと思われるが、そのような特殊な状況で書かれる文章にはどうしても不自然さがつきまとうという問題がある。現実の文章では、読者が異なれば、同一のテーマであっても内容に何らかの違いが生じ、そのような内容の違いは言語面にも何らかの影響を及ぼすものと予想される。読者・内容・言語の三者の関係をそのように押さえておくことは、現実の文章を考えるうえで重要であろう。そこで小論では、「同じ内容」ではなく、現実に存在する「類似内容」の文章間の言語面の相違について検討することにする。

具体的には、小学校から大学までの4段階の日本史の教科書を資料とした。日本史教科書は、まず、日本史という同一のテーマについて書かれた「類似内容」の資料である。また、教科書という性格から小学6年とか中学2年というような指定があり、他の文章とは異なって読者が明らかであるため、小学校、中学校というように異なる段階の教科書を資料にすれば、「異

なる読者」という条件が満たされる。そのうえ、日本史は小学校から大学まで幅広く指導される科目なので、その教科書を資料とすれば幅広い比較が可能になる。以上の点で、小学校から大学までの日本史教科書は調査の目的にかなう適切な資料と考えられる。この資料による調査の報告は小論が3回目であるが、これに先立ち文の長さの調査⁽¹⁾、および、文の構造を表す指標の一つとしての述語数の調査⁽²⁾を行っている。

教科書の文の構造は、小学校から大学へと段階をおって内容が詳細になるとともに複雑化すると一般には考えられている。しかし、文の構造の複雑さとは何か、それを適切に表す指標とは何かという、より基本的な問題に対しては、いくつかの試みはなされたものの、いまだ明確な解答は得られていない。その点が、同じように「読みやすさ」(readability)にかかわる要因として挙げられながらも、測定すべきことの明らかな文長や漢字の割合と、大いに異なる点である。

文の構造の複雑さに関する先行研究については既に別稿⁽⁴⁾において述べたので省略し、文構造の複雑さを表す指標の一つとされる「主語と述語の距離」に限定して述べる。堀川(1957)は、文章を難しくする原因として国語学者や有識経験者の挙げる項目を整理したが、その一つに「主語と述語が離れすぎるとき」というのがある⁽⁵⁾。このことから、主語と述語の距離は文章のわかりやすさに関わる指標の一つとされていることがわかるが、その実証的な研究は、今までのところ報告されていない。

小論の目的は、異なる読者を対象とした類似内容の文章間において、文構造の複雑さを表す指標の一つである「主語と述語の距離」がどのように変化するかを調査することにある。

2 資料

調査の資料には、小学校から大学までの日本史教科書を各3種ずつ、計12冊もちいた。大学の場合は、本の前書き等に短大や大学の教養課程の教科書として利用できるとの記述のあるものを選んだ。資料とした教科書とそ

の略号は、以下のとおり。

- 小 A 大野連太郎他 『小学生の社会科 人間の歩み 6 上』中教出版，1990 年，再版
- 小 B 石井素介他 『改訂 小学社会 6 上』教育出版，1991 年
- 小 C 石川忠雄他 『小学校社会 6 上』学校図書，1991 年
- 中 A 佐々木銀弥他 『社会科 中学新歴史』帝国書院，1990 年
- 中 B 児玉幸多他 『中学社会 歴史的分野』日本書籍，1990 年
- 中 C 青木和夫他 『中学生の社会科 日本の歩みと世界 歴史』中教出版，1990 年
- 高 A 尾藤正英他 『新訂日本史』東京書籍，1990 年
- 高 B 永原慶二他 『高等学校 日本史 改訂版』学校図書，1989 年
- 高 C 井上光貞他 『新詳説日本史』山川出版社，1990 年
- 大 A 青木和夫他 『日本史』学陽書房，1990 年，再版 8 刷
- 大 B 寶月圭吾編 『新稿 日本史概論』吉川弘文館，1990 年，初版 27 刷
- 大 C 竹内誠他編 『教養の日本史』東京大学出版会，1991 年，初版 8 刷

調査対象には、これらすべての本に存在する「大化改新」「江戸幕府」「明治維新」の三つのトピックについて述べた本文を選んだ。さらに、同一のトピックの本文の中でも類似する内容を述べた文を、形式段落を単位として、全部で 350 文とり出した。

資料を本文に限ったのは、本文とそれ以外の部分との間に文体的な違いが生じている可能性があるためである。同様の考えから、本文中にあっても（ ）に囲まれた部分は資料に含めなかった。また、記述の最初に記号が付されていたり、その部分だけが特に小さな活字になっている場合も本文と異なると判断し、資料に含めなかった。形式段落を単位としたのは、本調査の目的がまとまった類似内容を述べる文章の文構造を調査することにあるためである。350 文の内訳は、以下のとおり。

表 1 350 文の内訳

段階	大化改新	江戸幕府	明治維新	全 体
小 学 校	28 文	13 文	23 文	64 文
中 学 校	29 文	13 文	18 文	60 文
高 校	29 文	27 文	19 文	75 文
大 学	95 文	30 文	26 文	151 文
計	181 文	83 文	86 文	350 文

3 主語と述語の距離の測定

主語と述語の距離をどのように規定すべきかに関しては、調査自体が行われていないため定説がない。そこで今回の調査では、以下のように決めて行った。

〈原則〉

- ① 主語と述語の距離は、両者の間に存在する文節数によって測定する。
すなわち、次の例では、主語と述語の距離は 4 文節となる。(____は主語、~~~~は述語を示し、いずれかの下の数字が主語と述語の距離を示す。主語が複数の文節から成る場合は、測定に直接かかわる末尾の文節にのみ下線を付す。)

小 A 4 家康は、まもなく、将軍の職を 子に ゆずりました。

次の例のように主語と述語とが隣接する場合の距離は、0 文節となる。

中 C 5 翌年、改革の基本方針が 示された。

- ② 同一の述語に対し主語が複数ある場合、または、同一の主語に対し述語が複数ある場合は、主語と述語の距離はそれぞれ別個のデータとして扱う。

小 A 8 もとの公家と 大名は 華族、武士は 士族、農工商は
平民と よばれるようになり、 国民は、 だれでも 自由に

職業や 住所を 決め、 みょう字を 名のる ことが
できるようになりました。

大 A 29 左大臣に 宝皇女らが 兼ねて 重用してきた 阿部内麻呂、⁸
右大臣には、 本宗家に 代って 蘇我氏の 新たな 代表者と
なった 蘇我石川麻呂が 起用された。

小 B 4 儀式が 終わりに⁰ 近づいた ころ、 中大兄皇子たちは、
とつぜん、 蘇我入鹿を おそい₂ 刀で きりつけました₄
〈主語〉

① 主語はやや不自然でも原則として書かれているものとし、意味的に補うことはしない。

小 C 2 太子が なくなると、 蘇我氏の 勢いは ますます 強く
なり、 朝廷の 政治を 自由に 動かすようになりました。

② 主題と主語の両方をもつ文では、主題の方を小論での「主語」とみなす。

中 C 12 外交では、 これまで 日本は、 とくに 百済との 関係が
親密でしたが、 新羅や 唐とも 交友的な 関係を 結ぶ ことを
めざしました。

大 A 47 新政権の 政治は、 宮廷の 礼法や 制度を 唐の 制度に
ならい、 対唐外交をはじめ、 650 年から 翌年にかけて
難波長柄豊碕宮を 造営した ことなどに 特色が あった。

〈述語〉

述語は、小論と同様の資料により述語数を調査した先の報告で用いた基準⁽⁷⁾により認定する。

〈文節〉

文節は、小論と同様の資料を文節に区切って文の長さを調査した先の報告⁽⁸⁾のデータに次の修正を加えたものとする。(___ は新たにまとめた文節)

① 森田・松本 (1989) により複合辞を認定し、文節をまとめる。

大御所として 幕政を 指導した。

權威を もちつづけていた。

- ② 文の長さの報告で用いた基準のうち、細則 2 の ⁽⁹⁾a により区切られていた文節をまとめる。

全国を 国・郡・里に 分けて 治める。

公卿・諸侯・役人を ひきいて 神前に 誓う。

II 日本史教科書における主語と述語の距離

主語と述語の距離は、主語と述語がともに存在しなければ測定できないため、資料の 350 文からまずねじれた 3 文を除き、残る 347 文中で主語と述語がともに存在する 270 文を調査対象とする。内訳は次のとおり。

表 2 270 文の内訳

段 階	文 の 数
小 学 校	49 文
中 学 校	35 文
高 校	60 文
大 学	126 文
計	270 文

1 データの扱い方

主語と述語の組は、前述したように、同一文中に 2 組以上あることがあるが、そのような場合、主語と述語の距離はどのように測るのが適当だろうか。

小 A 1 家康は、1600 年、関ヶ原の戦いで 反対派の 軍を 破り、
 全国の 大名を したがえました。

この例には主語と述語の組が 2 組ある。「家康は」と「破り」、「家康は」と「したがえました」の 2 組で、前者の距離は 4 文節、後者の距離は 7 文節である。このように同一文中に主語と述語の組が複数ある場合、主語と述

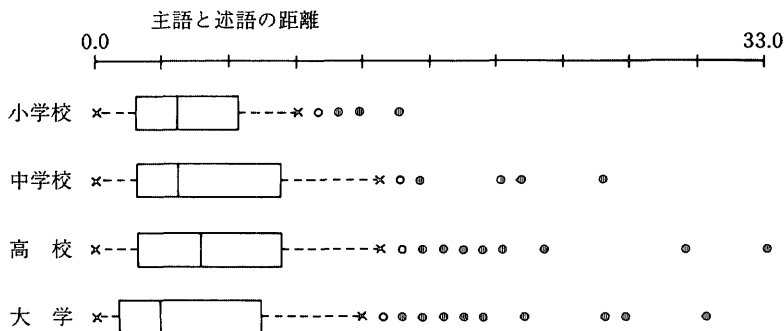


図 1 主語と述語の距離 (主語と述語のすべての組の距離)

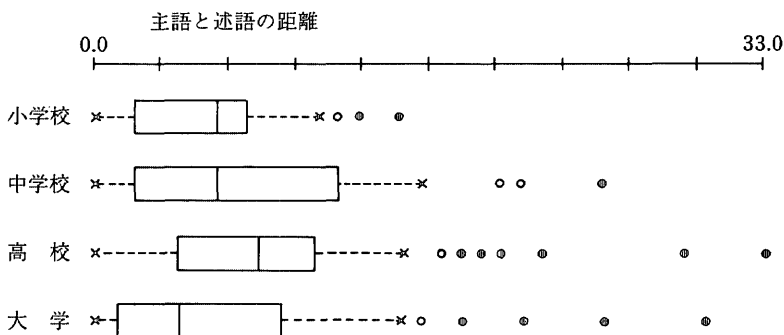


図 2 主語と述語の距離 (文ごとの最長距離)

語の距離のデータの取り方は、①個々の組ごとにとる、②最長の距離により文ごとにとる、の二つの方法が考えられる。

小論では、1) 同一資料によってすでに調査した、文長や述語数が文を単位としている、2) 文単位の方が処理しやすい、の 2 点から、②の文ごとの最長距離の方を採用したいが、そのためには 2 種の測り方によって結果にどのような違いが生じるのかを押さえておく必要があるだろう。

図 1~2 は探索的データ解析において利用される箱型図⁽¹⁰⁾で、分布の概略を知るのに適している。箱の中にデータの中心をなす半数のデータが入ってお

り、箱の中間の縦線は中央値を示す。分布の位置を要約する中央値に注目し、小学校から大学までの4段階の変化を見ると、いずれの測り方においても、小学校と中学校が同じ中央値をとり、高校で伸び、大学では逆に短くなる。この結果から、いずれを用いても段階間の関係は同じことが確認されたため、小論では文ごとの最長距離を主語と述語の距離とすることにする。

ただし、この場合、同一文中に主語と述語の組が複数ある文については、最長距離をとることになるわけであるが、同一文中に主語と述語の組が1組しかない文については、その距離を最長距離として扱うことになる。文ごとの最長距離をとるということは、両者の違いを問題にしないということであり、具体的には次の2例を同様に扱うことを意味する。

高C11 家康は 1605年、子の 秀忠に 將軍職を ゆずり、その後
駿河に 移って 大御所として 幕政を 指導した。

高C4 江戸に 居城を 定めた 家康は、これより 領国内への 家
臣団の 配置、江戸の 町づくり、領内の 検地など、
本格的な 領国経営を はじめた。

2 段階別の代表値・分布型

主語と述語をもつ270文を資料に、文ごとに主語と述語の組のうち距離の最長のもをその文の主語と述語の距離と定め、それが小学校から大学までの4段階においてどのように変化していくかを、⁽¹¹⁾ 平均値・五数要約値と、箱型図・度数分布図により考察した。資料は「大化改新」「江戸幕府」「明治維新」の三つのトピックから成るが、ここではそれらを合わせた「全体」の変化を見る。

表3の五数要約値のうち分布の位置を要約する中央値を見ると、主語と述語の距離は小学校から順に6.0, 6.0, 8.0, 4.0文節と変化する。この変動は平均値によるものとやや異なるが、高校で距離が最大となり大学で減少するという傾向は、平均値によっても中央値によっても同じく示された。

データの広がりには、①最大値と最小値による「範囲」、②上ヒンジと下ヒ

表 3 段階別にみた主語と述語の距離の平均値と五数要約値

(単位は文節)

段階 \ 値	平均値	最小値	下ヒンジ	中央値	上ヒンジ	最大値
小学校	5.2	0.0	2.0	6.0	7.5	15.0
中学校	7.4	0.0	2.0	6.0	12.0	25.0
高校	8.7	0.0	4.0	8.0	10.8	33.0
大学	5.8	0.0	1.0	4.0	9.0	30.0

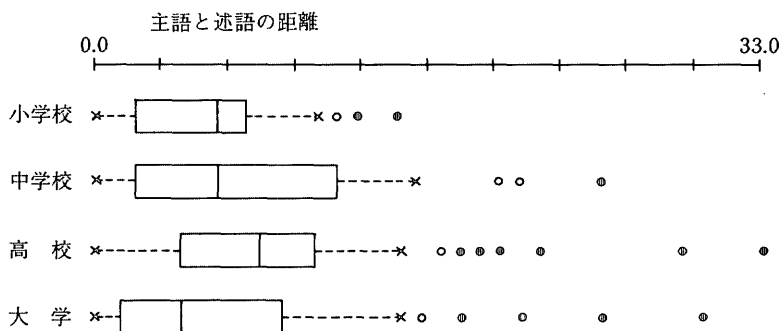


図 3 段階別にみた主語と述語の距離

ンジ (箱の幅) による「ヒンジ散布度」, の二つの示し方がある。「範囲」は最大値や最小値が分布の中心から遠く隔たっている場合, 必ずしも分布の真のあり方を表さないが, 「ヒンジ散布度」はデータの 50% についてその広がり方を示すという特徴がある。

表 3 について, 「範囲」は小学校から順に 15.0, 25.0, 33.0, 30.0 文節と変化し, 高校で最も広がり, 大学ではやや狭まる。「ヒンジ散布度」は, 小学校から順に 5.5, 10.0, 6.8, 8.0 文節と変化し, 中学校で最も広がる。

図 3 の箱型図を見ると, 約半数のデータの入る箱の位置から次のことがわかる。まず, 小学校と中学校の間では, 上ヒンジと最大値の伸びに主語と

述語の距離の増大が表れている。中学と高校の間では、上ヒンジが高校でやや下がるものの、中央値と最大値に主語と述語の距離の増大が表れている。高校と大学の間では、最小値を除く四つの値（下ヒンジ、中央値、上ヒンジ、最大値）に主語と述語の距離の縮小が表れている。4段階を通じた最大は、高校にある。

次に図4～7の度数分布図によってより詳しい分布の状況を見る。

小学校は4段階中でデータの範囲が最も狭く、0—15文節の間に集中するため、中学校以上と比べ、各区分の相対度数が高い。相対度数の最も高い区分は6—7文節で、26.5%であるが、その次の0—1文節でも20.4%と高い相対度数を示す。これには、6—7文節を除けば、右下がりの直線的な分布型をあてはめることができそうである。

中学校は小学校よりデータの範囲が広がり、0—25文節となる。各区分の相対度数は小学校より下がり、相対度数の最も高い0—1文節で、20.0%である。これには、小学校に比べて緩やかな右下がりの直線的な分布型をあてはめることができそうである。

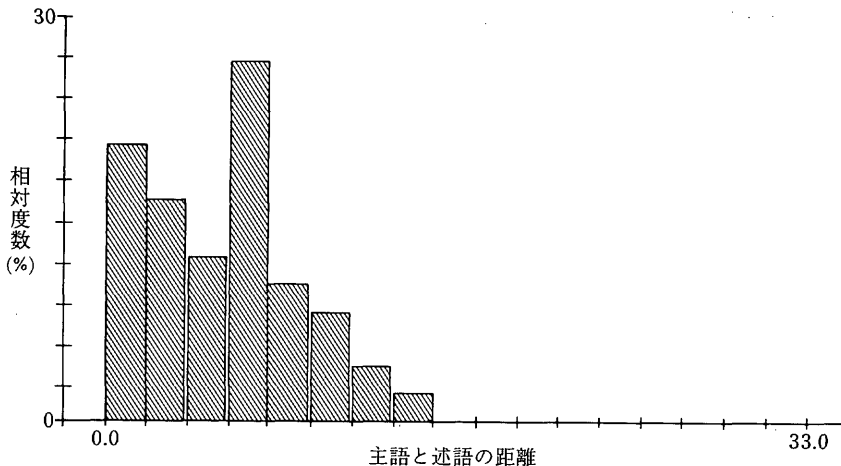


図4 主語と述語の距離の度数分布図 (小学校)

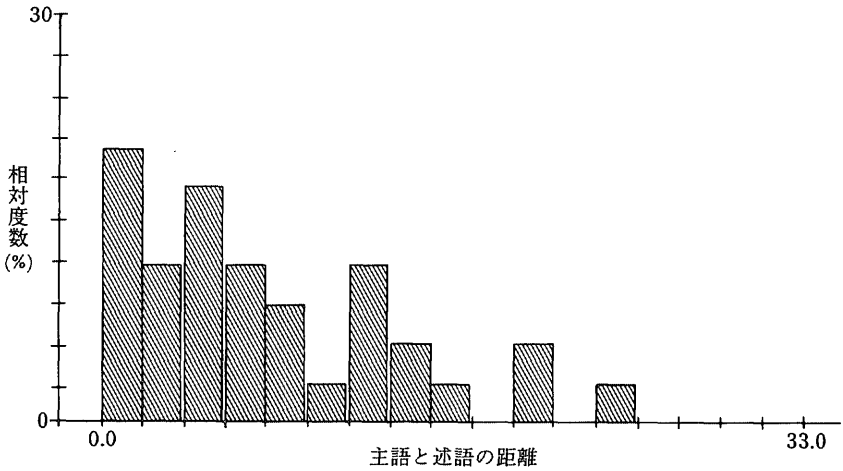


図 5 主語と述語の距離の度数分布図 (中学校)

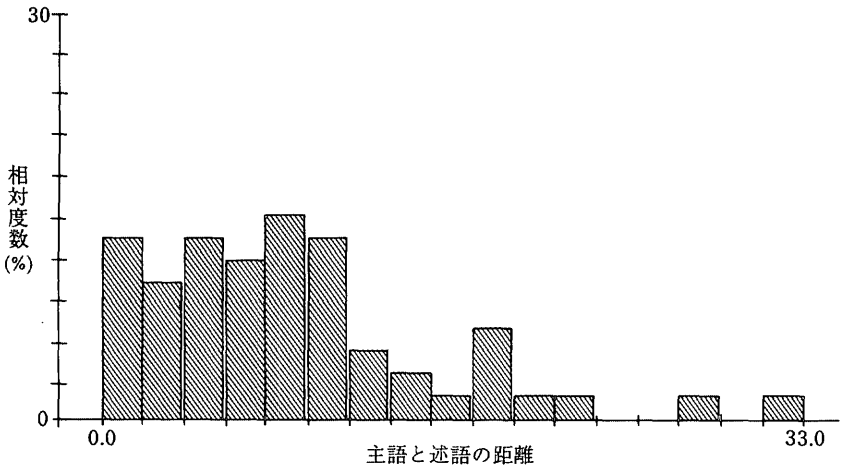


図 6 主語と述語の距離の度数分布図 (高校)

高校は中学校よりさらにデータの範囲が広がり、0—33 文節となる。各区分の相対度数は小学校から下がり続け、相対度数の最も高い 8—9 文節でも、15.0% である。これには、中学校よりもさらに緩やかな右下がりの直

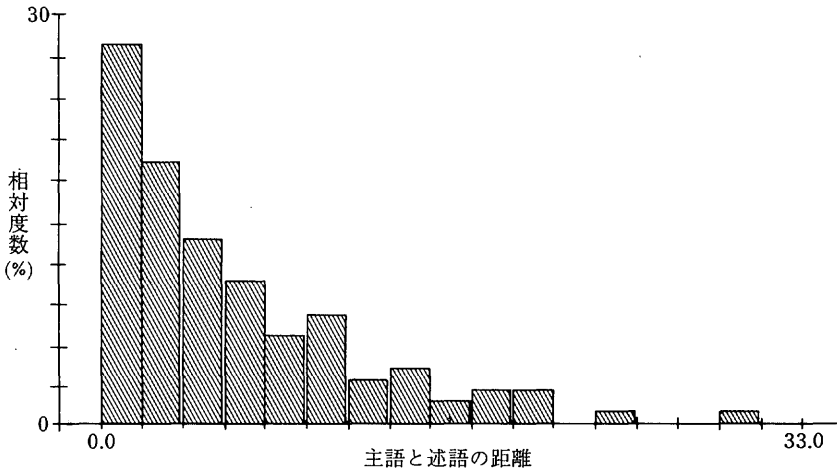


図 7 主語と述語の距離の度数分布図 (大学)

線的な分布型をあてはめることができそうである。

大学は高校よりデータの範囲がやや狭まり、0—30 文節となる。相対度数は 0—1 文節に 27.8% が集中し、高校までとは打って変わって、典型的な L 字型曲線の分布型をあてはめることができるだろう。

各段階の度数分布には、それぞれ、小学校は急な右下がりの直線、中学校は緩やかな右下がりの直線、高校はさらに緩やかな右下がりの直線、大学は L 字型曲線の分布型が想定できる。これら 4 段階の分布型を模式的にまとめると図 8 になる。

データ数が 270 文と限られているため、今回の調査に見られた分布型が、データ数を増やしてもなお認められる一般的なものなのか、あるいは、今回のデータにのみ現れた一回的なものなのかは、判別できない。しかし、図 8 は、小学校から高校にかけては、いずれも直線的な分布型でその傾きのみが異なるという意味で、連続的あるいは量的な変化であるが、高校から大学にかけては、直線から L 字型へと分布型そのものが変化することを示している。これは高校から大学にかけては小学校から高校までとは異なる質的な変

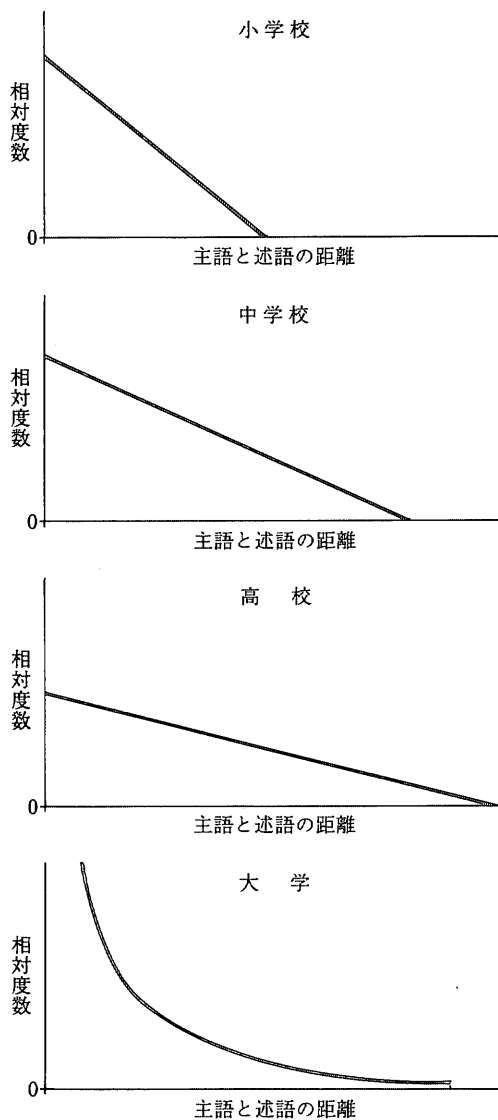


図 8 主語と述語の距離の段階別分布型の模式図

化が想定できるという、きわめて興味深い仮説を提示しているように思われる。そこで、ここでは、この仮説にいうような傾向に注目し、次に述べる類似内容の文との関係の中でこの仮説を支える具体的な言語事実を考察することにより、どの程度この仮説が一般的といえるかを探る。

Ⅲ 類似内容における主語と述語の距離

前章の調査から、小学校から高校までは、負の傾きをもつ直線的な分布型のもとに、段階をおって主語と述語の距離が伸びるのに対し、大学ではL字型分布のもとに、逆に短くなることがわかった。この章では、それが具体的な文の中でどのような言語事実として現れるのかを考察する。

1 小学校から高校までの伸び方

主語と述語の距離は小学校から高校まで段階的に長くなるが、それは段階をおって内容が詳しくなることに対応する。以下、主語と述語の距離が短い場合と長い場合とに分けて考察する。

1-1 主語と述語の距離が短い場合

例 1～3 は大化改新からの文で、蘇我氏の勢力が増したことを述べている。主語と述語の距離は、小学校 1 文節、中学校 4 文節、高校 5 文節と段階的に伸びている。

例 1 小学校 (B 1) 1 文節

太子と馬子がなくなったあと、蘇我氏の勢いが強く
なりました。

例 2 中学校 (C 1) 4 文節

聖徳太子がなくなると、蘇我氏が勢いを増して、朝廷の
権力をひとりじめするようになった。

例 3 高校 (A 1) 5 文節

聖徳太子がなくなると、朝廷では蘇我馬子の子蝦夷と孫の入鹿が権勢をふるい、とくに入鹿は山背大兄王の一族をほろぼして、専制的な政治をおこなった。

内容は小学校から高校へと段階的に詳しくなる。述べ方は、まず、聖徳太子や蘇我馬子の死を節の形で述べ、次いで「蘇我氏の勢力」や「蘇我氏」、あるいは、蘇我氏の特定の個人名を主語にして蘇我氏の勢力拡大を述べる。そこまでは各段階に共通である。中学校と高校では、それに加え、「蘇我氏」または蘇我氏の特定の個人名を主語にして蘇我氏の専制ぶりを述べる。このように、段階をおって内容の詳しさは増すものの、述べ方の大きな枠は変わらない。そのことが主語と述語の距離の段階的な伸びと対応している。

1-2 主語と述語の距離が長い場合

例4～6は江戸幕府からの文で、家康が江戸幕府を開くまでの過程を述べている。主語と述語の距離は、小学校6文節、中学校12文節、高校18文節と段階的に伸びている。

例4 小学校 (C2) 6文節

この戦いで豊臣方を破り、全国の大名をしたがえた家康は、1603年、朝廷から征夷大將軍に任じられ江戸に幕府を開きました。

例5 中学校 (B2) 12文節

秀吉の死後、関東地方を領地とする大大名の徳川家康は、豊臣氏をもり立てようとして家康に対立する石田三成らの大名を関ヶ原の戦いで破り、まもなく征夷大將軍となつて、江戸幕府を開いた。

例6 高校 (B3) 18文節

秀吉の死後、家康は大名間の争いを利用して五大老の筆頭としての政治的立場を強め、1600年、美濃の関ヶ原で石田三成らを破つて、覇権を確立し、1603年、

征夷大將軍に 任じられて 江戸幕府を ひらいた。

内容はおおむね小学校から高校¹⁶へと詳しくなる。述べ方¹⁸は、いずれの段階も「家康」を主語としてその行動を述べるというヒト中心の表現である。

同じ述べ方の枠の中で内容のみが段階的に詳しくなる結果、主語と述語の距離が長くなるものと思われる。具体的には、家康の行動を表す述語の数が段階的に増えることがそれを表している。すなわち、小学校の例4では「任じられ」「開きました」の2語、中学校の例5では「破り」「なって」「開いた」の3語、高校の例6では「利用して」「強め」「破って」「確立し」「任じられて」「ひらいた」の6語となる。

例4～6の小学校から高校までの例では、主語と述語が構成する文の型(ヒトを主語としてその行動を述べる)は共通であり、段階ごとの内容の詳しさに応じて主語述語間にいくつかの語(文節)が入ってくる。そのことが、いずれも直線的分布型をもちながら傾きの値のみ異なるという前章の仮説に関係しているのではないだろうか。

2 高校から大学への縮み方

主語と述語の距離は高校から大学で短くなるが、それは述べ方の変化と対応しているようである。以下、主語と述語の距離が短くなる際の述べ方の代表として、①名詞句、②コト主語の受身文、③コト主語の自動詞文の三つの場合について考察する。

2-1 名詞句になる場合

例7～8は大化改新からの文で、改新詔の内容を述べている。主語と述語の距離は、高校が29文節、大学が0文節で、高校から大学で大幅に短くなっている。

主語と述語の間に多くの語があるにもかかわらず例8が0文節となるのは、複合辞を述語に含めるという基準による。つまり、複合辞を認めることにより「制定である」のような名詞述語は1文節の述語となる。さらに、

例 8 では、改新詔の(1)～(3)の部分¹を述語中の「制定」にかかる連体修飾と見なせないため、述語に含めたのである。もっとも、「制定で | ある」のように区切り、「ある」のみを述語としても、例 8 の主語と述語の距離は 12 文節となって、例 7 よりも短いことに変わりはない。

例 7 高校 (B 8) 29 文節

それは、(1) 皇族や 豪族の 私有地・私有民を 廃止して 公地・公民とし、その かわりに 食封などを 支給する。(2) 中央・地方の 行政区画を 定め、 軍事・交通制度を ととのえ、 中央集権制を しく。(3) 戸籍・計帳を つくり、 班田収授法を おこなう。(4) 調などの 新しい 税制を 実施する、という ものであった。

例 8 大学 (C 7) 0 文節

その 内容は、(1) 私地私民の 収公、(2) 地方行政制度の 制定、(3) 戸籍・計帳・班田収授法の 制定、(4) 新税制の 制定である。

内容はいずれも改新詔の 4 項目についてであるが、高校はより具体的、大学はより抽象的といえる。いずれも名詞文で、改新詔の 4 項目を列挙するという述べ方の大きな枠は同じであるが、列挙する 4 項目の述べ方が異なり、高校が文の形であるのに対し、大学は名詞句の形である。名詞句で抽象的に述べるのは、大学によく見られる表現といえるだろう。このように、高校と大学とでは内容と述べ方の両面に変化が見られるが、そのうち述べ方の変化が主語と述語の距離が短くなることと対応している。

2-2 コト主語の受身文になる場合

例 9～10 は大化改新からの文で、改新後の人事について述べている。主語と述語の距離は、高校が 13 文節、大学が 0 文節で、大学で短くなっている。

例 9 高校 (A 4) 13 文節

中大兄皇子は、孝徳天皇を たて、みずからは その 皇太子と
 なって 国政を 担当し、左大臣¹、右大臣を おいて⁹
 畿内豪族の 有力者を これに 任じた。¹³

例 10 大学 (B 12) 0 文節

14 日には、孝徳天皇の 即位、中大兄皇子の 立太子が⁰
 発表され、また、中臣鎌子が 内臣、阿倍内麻呂が 左大臣、
 蘇我倉山田石川麻呂が 右大臣、僧旻・高向玄理が 国博士という
 新政府の 首脳部人事が 決定された。

内容は高校よりも大学の方が⁰詳しい。述べ方は、高校が中大兄皇子を主語にその行動を述べるヒト中心の表現であるのに対し、大学は「立太子」「首脳部人事」を主語にしたコト中心の受身文である。受身は客観的な表現として論説文などに多く現れるといわれるが、大学にそれが現れたのは段階の差にも対応していると思われる。

主語と述語の距離が大学で短くなるのは、受身文になったことと対応している。さらに、受身文は高校よりも詳しい人事の内容を、「中臣鎌子が内臣、阿倍内麻呂が左大臣、蘇我倉山田石川麻呂が右大臣、僧旻・高向玄理が国博士という」という長めの連体修飾中で効率よく述べることを可能にしたこととも対応している。

2-3 コト主語の自動詞文になる場合

例 11～12 は江戸幕府からの文で、主語と述語の距離は、高校が 5 文節、大学が 0 文節である。例 12～13 は大学の教科書 B にあって連続する 2 文であり、例 11 の内容がそれらにほぼ対応するが、ここでは例 11 の前半部分の「挙兵し」までと例 12 とを対象とし、主語と述語の距離を考察する。

例 11 高校 (C 7) 5 文節

これに対して 五奉行の 一人 石田三成は、小西行長らと
 はかつて 家康の 排斥を くわだてて 挙兵し、1600 年、
 全国の 大名は 二つに わかれて、いわゆる 天下分け目の¹

関ヶ原の戦いと なった。

例 12 大学 (B 1) 0 文節

慶長 3 年 8 月, 秀吉が 死ぬと, 統一政権の ゆくえを
めぐって 大名間の 対立₀が 激化した。

例 13 大学 (B 2)

すでに五大老の筆頭として最強の実力を貯えていた家康は, 大名間の
軋轢を巧みに利用しながらその地位をかため, ついに「天下分け目」
の決戦である関ヶ原の役に勝利を占めて豊臣政権の後継者の位置に坐
った。

例 11 の前半部分と例 12 の内容については, 高校がより具体的であるの
に対し, 大学はより抽象的である。述べ方は, 高校が「石田三成」を主語に
立てその行動を述べるというヒト中心の表現であるのに対して, 大学は「対
立」というコトを主語とする自動詞文である。この違いは, 事件を人の行動
として描くのか, 現象として描くのかという表現のし方の差から生じてお
り, 段階の差にも対応している。主語と述語の距離は, ヒト主語でその行動
を列挙する文では長くなるが, コト主語の自動詞文では短くなる。
高校から大学にかけては, 述べ方の変化が直線的分布型から L 字型分
布型への変化に対応するのかもしれない。

IV まとめ

小論は, 異なる読者に対して類似する内容を述べる文章間に生じる言語的
な相違を文構造, 特に主語と述語の距離, の面から明らかにすることを目的
とし, 小学校から大学までの日本史教科書の類似内容の文章を資料として行
った調査の報告である。調査では, まず, 平均値・五数要約値と箱型図・度
数分布図によって主語と述語の距離の段階的な変化を追った。次に, 類似内
容の文について, 主語と述語の距離の段階的な変化を具体的に考察した。

主語と述語の距離は, 小学校から高校までは段階的に長くなるが, 高校か

ら大学では逆に短くなることが明らかになった。度数分布図は、小学校が急な右下がりの直線、中学校が緩やかな右下がりの直線、高校がさらに緩やかな右下がりの直線という分布型を示したが、大学ではそれがL字型曲線へと変わった。限られたデータから一般的な傾向を云々するのは慎まねばならないが、4段階の分布型の相違は、仮説としては大変、興味深い。

そこで、類似内容の文の考察においては、この四つの分布型を支える具体的な言語事実の考察を行い、その結果からこれらの分布型のもつ一般性について検討することにした。類似内容の文の考察の結果、小学校から高校までは、同じ述べ方で内容の詳しさのみが増すことが、主語と述語の距離の段階的な伸びに対応することがわかった。また、高校と大学では、内容の詳しさの変化ではなく、述べ方の変化に対応して、主語と述語の距離が短くなることがわかった。

内容の詳しさと述べ方との間の以上のような関係は、今回の調査データの文にのみ現れた特殊な現象とは考えにくいことから、4段階の分布型はデータ数を増やしても成立する一般的なものではないかと予想される。

むろん、この分布型が一般的なものかどうかは、より多くのデータによって検証されねば、確かなことは何もいえない。小学校から大学までの4段階に現れた主語と述語の距離の傾向は、「大化改新」「江戸幕府」「明治維新」というトピックに分けると、データ数が少ないこともあり、保持されない。また、データの中には他の段階に内容的に対応する文をもたないものも多い。さらに、どの段階にも主語と述語の距離を伸ばす述べ方と縮める述べ方の両方が存在する。一つの分布型は、そのようなさまざまな要素のからみあいの上に成立しているのではないだろうか。

このようなことから、今後の課題としては、類似内容の文章という点を守りつつ、データ数を増やし、今回の調査から得られた分布型が一般的かどうかをまず検証したい。さらに、分布型を成り立たせる要素についても、より詳しくかつ総合的に考察したい。

小論の意義としては、文構造の複雑さを表す指標の一つとして挙げられな

がら調査されなかった主語と述語の距離について調査を行ったことに第一の意義があるだろう。また、調査の過程で、主語と述語の距離の測定方法について、すべての主語と述語の組の距離をとらなくとも、文ごとの最長の距離をとれば、すべての組の距離をとったのと同様の傾向を示すことがわかったのも小論の意義といえる。さらに、類似内容の文によって主語と述語の距離の段階的な変化の様子を具体的に考察したことにも意義があると思われる。

〔謝辞〕 研究の枠組みや基本方針については、中村明先生に御教示を賜った。計量的な分析については、石井正彦氏に御助言をいただいた。記して感謝申しあげる。

〔注〕

- (1) 小宮 (1993 a).
- (2) 小宮 (1993 b).
- (3) 堀川 (1957) p. 28.
- (4) 小宮 (1993b) pp. 139-140.
- (5) 堀川 (1957) p. 27.
- (6) 句点でおわる文字の連続を文とする。教科書という性格から、感嘆符や疑問符でおわる文は、資料とした文中にはなかった。
- (7) 述語の認定基準については、小宮 (1993 b) pp. 142-143 を参照。
- (8) 文節の認定基準については、小宮 (1993 a) pp. 61-63 を参照。
- (9) 小宮 (1993 a) p. 62 の次の規則をさす。「対等な関係にある場合のうち、あいだに区切り符号があれば切る。例) 全国を | 国・ | 郡・ | 里に | 分け、 例) 公卿・ | 諸侯・ | 役人を | ひきいて」
- (10) 探索的データ解析については、渡辺他 (1985) を参照。
- (11) 探索的データ解析においてデータを要約する際の五つの値をさす。それらは「中央値」「最小値」「最大値」の三つと、中央値と最小値の中央値である「下ヒンジ」、中央値と最大値の中央値である「上ヒンジ」の計五つである。
- (12) 分布型のあてはめ方については、いくつかの統計学的方法があるが、小論ではデータ数が少ないことからそのような方法による効果が期待できないため、断念した。あてはめ方の詳細については、渡辺他 (1985) の「7. 抵抗直線のあてはめ」「10. 分布のあてはめ」を参照。

〔引用参考文献〕

- 小宮千鶴子 (1993a)「文の長さに現れた読者意識——日本史教科書の類似内容の対比から——」『中央学院大学教養論叢』第5巻第2号, pp. 55-82.
- 小宮千鶴子 (1993b)「読者層を異にする文章間に見られる文構造の相違——述語数による日本史教科書の段階比較——」『中央学院大学教養論叢』第6巻第2号, pp. 137-165.
- 堀川直義 (1953)「読みやすさの一実験」『言語生活』10, 筑摩書房, pp. 18-24.
- 堀川直義 (1957)『文章のわかりやすさの研究』朝日新聞社調査報告 65.
- 森田良行・松木正恵 (1989)『日本語表現文型』アルク.
- 渡辺洋他 (1985)『探索的データ解析入門』朝倉書店.